

八ヶ岳教会と江戸の道楽寺

牧師 山本 護



信徒数と財政が増えて、八ヶ岳伝道所が八ヶ岳教会になりました。キリストを監督とし、聖霊の風を肌を感じながら皆がおのおの働いた結果です。数多の献金の他にも、さまざまな方から貴重な物を戴いていますが、こうした「物もらい」と聖書を語ることが私の仕事。大道芸の歴史を調べた時にこんな文書がありました。

「阿房陀羅經(アハラキョウ)というものは、物もらいの坊主、小さき木魚を二つ持ちて打ち叩きつつ人家の前にも来たり、また盛れる場所の路傍に立ちて、戯れし文句をしゃべるものにして、その戯れ文句を阿房陀羅經といい、阿房陀羅經を読む者を道楽寺の和尚という(『絵本江戸風俗往来／道楽寺』平凡社東洋文庫)。

物もらい坊主に親しみを感じ、道楽寺の境内にぐっと踏み入って行くところでした。「経文唱うるは僧かというに否、僧にもあらず、また俗にもあらず。さればとて自称して道楽寺の和尚というより、あたまも剃りて坊主なりしも、忍辱などの面倒を知らず」。

ますます親しみを感じてしまいます。ちなみに、物もらい坊主の活動範囲は、「芝の新網・神田の橋本町、下谷山崎町は道楽寺和尚の本山と聞こえたり」。つまり江戸庶民の、それもとりわけ貧者の歓楽街で、ここ八ヶ岳教会の立地とはまるで違います。

イエスは念入りに状況を語って弟子を使いに出した。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ロバが見つないであり、一緒に子ロバのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、〔主がお入り用なのです〕と言いなさい。すぐに渡してくれる(マタイ 21:2~3)」。

主のために必要な物は、忍辱などの面倒なしにずっと「もらえる」らしい。手に入らない物は主のために必要ではない。厚かましいが爽やかだ。八ヶ岳教会にある物は「主がお入り用」だったから。礼拝堂の扉へと敷かれた花崗岩の延段石も、物もらい坊主が「主がお入り用かも…」と小声でつぶやき戴いたものです。かつての宣教師館の庭にあった敷石で、キリストの兄弟姉妹が労苦して甲府から運んで下さった。お礼は感謝の祈禱だけ。

八ヶ岳教会は「もらう」だけではありません。「主がお入り用なのです」と求められたなら躊躇なくさっと手渡したい。江戸の粋な道楽者のようにΩ。